

「村上春樹とイラストレーター」展を企画して

執筆者：原島 恵（ちひろ美術館・東京 主任学芸員）

掲載誌：「イラストレーション（illustration）No.239」（玄光社）

安西水丸が急逝したのは、2014年3月だった。このとき、青山のギャラリー、スペースユイで毎年恒例の安西と和田誠のふたりによる展覧会「AD-LIB 展」の開催が直前に控えていた。和田は、安西に代わり、彼が好んで描いていたモチーフを描くなどして、共作を補完した。私は、この展覧会に足を運んだことをきっかけに、『村上春樹 雑文集』（新潮社）を手にとった。そこに収められた安西と和田について書かれたエッセイや、安西と和田による対談を読み、村上が、文章とイラストレーションを主と従の関係としてとらえているのではなく、しなやかに両者をつなぐ作り手でもあることに気づいた。そして、彼らが友情を育み、自由に遊ぶように共作をするさまに、他に類を見ない稀有な豊かさを見出したことが、展覧会企画の端緒となった。

2016年にちひろ美術館・東京で開催した企画展「村上春樹とイラストレーター—佐々木マキ、大橋歩、和田誠、安西水丸—」では、文章とイラストレーションの関係に焦点をあて、村上と4人のイラストレーターの共作を取り上げた。内容は、小説、エッセイ、翻訳、絵本など多ジャンルにわたった。鍛え抜かれた文体に支えられた村上の文章とイラストレーターたちの視覚的な表現は、闊達自在に響きあい、両者の余白や間合いに応じてさまざまな表情を見せ、物語の世界を描き出していた。佐々木マキによる『風の歌を聴け』（講談社）のカバー原画は、かつて村上が経営していたジャズバーに飾られていたことはあったが、本展が初公開となった。また、和田誠による『ポートレート・イン・ジャズ』（新潮社）の原画を展示した空間に、和田と村上が選曲した同名のオムニバス盤をBGMとしてかけたことや、村上の小説に出てくるメニュー「ホットケーキのコカ・コーラがけ」をカフェで提供したことなども話題となった。そして、2019年に惜しくも帰らぬ人となった和田の協力により、制作の背景について語られた貴重なインタビューを図録に収載できたことも幸甚であった。反響は大きく、海外からも問い合わせを受け、展覧会を訪れたファンから口々に「企画してくれてありがとう！」と身に余る言葉を頂戴し、学芸員冥利に尽きる思いだった。熱心な読者たちによって、村上の作品世界が日々深められていることがリアルに感じられた。

これまで、村上のファンの間では、彼の小説やエッセイに出てくる音楽や料理、舞台とな

る場所について語られてきた。しかし、絵画の目利き（Connoisseur）としての村上が語られることは、それほど多くないように思う。彼はイラストレーターたちと共作をしてきたほか、クリス・ヴァン・オールズバーグを始め、海外の秀作絵本の翻訳も手がけている。そうした仕事には、絵を見る確かな目を感じられる。展覧会の翌年、長編小説『騎士団長殺し』（新潮社）を読んで驚いたのは、美術について正面から記述されていたことだった。ひとりの画家の画業をたどる場面や、主人公が日本画についての定義を語る場面では、日本の近代美術の一側面が鮮やかに言語化されていて、村上の美術を見る目の確かさも明らかにされている。

本稿を書くにあたり、改めて、村上春樹とイラストレーターたちの共作を見返してみたが、時を経ても色あせない魅力に満ちていることを再確認した。巧みに想像や物語の世界へ誘うそれらの作品は、積極的な読み手を数多く育ててきたことだろう。そこには、読者が中心となって絵とテキストを結び、物語の世界を深めていく「絵本」の新たな可能性も示されているように思う。